

裏路地探険

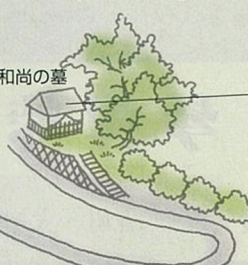
平家落人伝説が残る山間の里
木地師たちが今も腕を奮いこめる静かな里を廻す
木の香りが立ちこめる静かな里を歩く

■静かな木地師の里を歩く／竹野町三原

木地師とは、昔、木地屋といわれ、「手挽ろくろ」という道具を使って、盆や椀、膳、茶道具などをつくる職人のこと。木の材料を削るのは、細長い鉄の先を加工してつくった刃物で「ろくろ鉋（カンナ）」と呼ばれている。この「ろくろ」と「カンナ」を使いこなし制作する。今は少なくなった木地師だが、竹野町三原では現役でがんばる木地師たちの姿があった。加悦忠喜さんは生活の道具だけでなく、ひな人形や三重塔などの工芸品もつくっている。加悦忠喜さんはケヤキを使って盆の制作中。木の香りが立ちこめる作業場で、黙々とろくろをまわす二人であった。



説明をいただいた木地師・加悦忠喜さん



緊急の時に活躍する鐘。何十年も使われた様子がない



和尚の墓は大きな石で組まれている



すぐ横にある石が積まれた場所は「首切りカカア」の墓といわれている



盆をつくる木地師・加悦忠喜さん

三重塔をつくる木地師・加悦忠喜さん



三原の集落の中をぬける細く急な道

山深き里、三原では、平家落人伝説が残っている。平家平という地名が残る、そこに平家の落人が住んでいたという。また、屋敷跡が山中に残っているとも伝えられている。

三原では、わずかな田畑に米やソバをつくってきた。山菜がたくさん採れ、山の恵みを受けてきた。今はイノシシの被害除けの電気柵が、田畑に張り巡らされている。50軒あまりの三原の集落に、崑山さんの愛称で親しまれている墓がある。崑山さんとは曹洞宗のお坊さんのことだそう。

ある日、村人は崑山さんが雀を手のひらにとまらせて、米を食べさせているところに出くわした。「どうしたら、雀を手のひらにとまらせることができるのですか？」と村人が聞くと、崑山さんは「雀を見つけると捕まえようと思うだろう。その思いは雀にすぐ伝わってしまうものだ。殺生の心を持つ者は、雀もよく知っているのだよ」と答え、殺生はしてはいけないと説いたと伝えられている。また、ある日、いつもいじめられていた息子が、継母の首を切って殺してしまった。その日から毎日、



あたりの畑には、イノシシ除けの電気柵が張り巡らされている



草むらの中に見つけた墓

絵になる稲木



宝寿庵（尼寺）があったとされる場所

宝寿庵のあとには草でおおわれ、何も残っていない

夏になると美しい花を咲かせるハス畑がある

木々に渡された横木
この絵になる稲木に秋になると
黄金色の稲がかけられていく



平家平と呼ばれる場所がある山
反対側は絶壁になっているらしい



のどかな三原の風景



案内をいただいた
久保川治重さん

家の軒にかかっていた「のびる」
「のびる」の根は青腸に効くそうだが
自然の薬がつくられている



ニンニクが
軒に干されていた



軒先に積まれた「つる」
カゴなどをつくるのに使われる



坂道を登る参加者の皆さん

至国道178号

●裏路地探険隊員募集 平成16年10月2日(土)

「豊岡城下、歴史の跡をたどる」豊岡市
*実施日の10日前までに、18ページ掲載の
T2編集部へ、住所・氏名・年齢・電話番号・「裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキでお申し込みください。開催は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切日後、案内を参加ご希望の方へ送付致します。

継母が現れ、困った息子は崑山さんへ助けを求めた。崑山さんは継母の霊を供養すると、しばらく継母が出なくなつたという。崑山さんの墓の横にある石が積まれた場所は、継母の墓だといわれ、首切りカカアと呼ばれている。崑山さんにお参りすると、コロッと死ねる苦しまずに死ねるといわれているそう。

三原には宝寿庵という尼寺があったという。4代続いたが廃寺となり、現在は建物も何もなく、その面影を見ることはできない。宝寿庵の棟木板は公民館に残っているそう。

どうして、この山深い里へ人々は住み着いたのか？木地師たちの姿を見ると、そこに答えがあるような気がするのである。